

平成30年度 地域でつながる家庭教育応援事業

親子の学び応援講座

(伊達地区PTA連絡協議会)

日時：平成30年11月10日(土) 13:30~15:45
場所：伊達ふるさと会館 MDDホール

講演「東南アジア、山岳少数民族の子どもたちの瞳の輝きに学ぶ」

講師 特別非営利活動法人「シーエスアールスクエア」理事長 宍戸 仙助 氏

豊かな生活ができるはずの日本で、子どもたちのいじめや不登校が増加したり、自ら命を絶ったりする事案が問題となっている。宍戸氏が取り組んできた東南アジア山岳民族の子どもたちへの支援活動の話を通して、「逞しく生きる力(自己有用感)」や「人の役に立つことの大切さ」を学び、本当の幸せとは何かを親子で考えるきっかけとするために、本講座を実施することとした。

【講演の概要】

1 講演

(1) 東南アジアの子どもたちの瞳と日本の子どもたちの姿

- 東南アジアの山岳地帯の教育環境に恵まれない子どもたちへの支援と交流活動に携わってきた。ベトナム、ラオス、タイなどで、学校建設や井戸掘りの支援などを行ってきた。関わってきた子どもたちは、貧しく、教育環境に恵まれていないにもかかわらず、どの子の瞳もキラキラと輝いている。どうして、眩しいくらいの輝く瞳になっているのか。今日は、そのことを考える時間にした。
- 東南アジアの国々に比べ、豊かな国であるはずの日本で、自殺者が多い。自殺者数が交通事故による死者の5.8倍もある。これは、G8中ワースト2位である。「豊かなのに自殺?えっ。」と思う。
- 2016年の文部科学省のいじめ調査によると、小中学校合わせて、309,000人の子どもたちが苦しんでいるという現状がある。また、不登校の児童生徒は17万人。引きこもりの大人は70万人に達している。この現実をどう考え、どんな対策が求められるのか。東南アジアの子どもたちの瞳の輝きを、日本の子どもたちにも取り戻したい。

(2) 学校の果たす役割

- 学校の役割の一つに学力向上がある。確かに学力は高いにこしたことはないけれど、「何のための学力なのか」をもう一度問い直してみる必要がある。学校は、子どもたちの「夢と希望」を育む場でなければいけない。

(3) ラオスの子どもたちの現状

- ラオスの国旗に使われている赤い色は、内戦で流された血の色を表している。また、ベトナム戦争が終わった今でも、300トン以上の不発弾が残っており、毎年200人にも及ぶ死者が出ている。その半数は子どもたちである。不発弾の処理は、これから100年続くと言われている。カンボジアでは地雷、ベトナムでは枯れ葉剤のダイオキシンの問題が残っている。

しかし、教育環境が整っていないので、子どもたちに危険性を教えられない現状がある。



- ・ ラップ君という少年の兄は、森で遊んでいる最中に、不発弾に触れて吹き飛んで死亡した。その場面を目の当たりにしたラップ君は、ショックのあまり4ヶ月間、登校できなかった。
- ・ ビエンカム小学校の開校式で笑顔いっぱい写真に写る少年がいた。しかし、よく見ると胸に傷跡が残っている。彼は、臓器売買で片方の肺を売られたのである。
- ・ 山岳少数民族の子どもに「大きくなったら何になりたい?」と聞くと、「大きくなったら大人になりたい」と答えた。意味が分からなかったため、理由を聞くと、その子のきょうだいは3人とも大人になる前に死んでしまったそうである。だから、「大人になりたい」と答えたのだと言う。
- ・ 村に新しく学校ができると、全員が1年生になる。年齢が違って同じ教室で輝く瞳で学んでいる。子どもたちは瞳を輝かせて、毎日笑顔で暮らしている。日本人とどちらが幸せなのか考えてしまう。

(4) 心が通じ合えば友達

- ・ 東日本大震災のときに、ラオスやベトナムなどの子どもたちが日本に優しい心を寄せてくれた。年に1度しかもらえないお年玉をそのまま募金する子ども。お年玉をもらえない子どもは、毎日食べられるわけではない貴重な米を差し出した。米もない子どもは、年に数回のごちそうとなるニワトリやアヒルを持ってきた。それらは全て市場で換金した。子どもたちが、ご飯やおやつをがまんして、集めてくれたお金は日本円で1970円だった。この金額は少ないと思うか? 「お母さん、募金するからちょうだい」と言って、親からももらったお金とは違う。
- ・ 東南アジアの子どもたちの瞳の輝きが続くためには、3つの条件がある。1つめは「病気になること」、2つめは「災害がないこと」、3つめは「戦争がないこと」である。その3つの条件があり続けるように、勤務していた学校の子子どもたちが行動を起こした。自分たちで作ったラー油をバザーで売ってラオスの学校建設を支援した。また、現地の小学校の新しい井戸は、子どもたちの善意の寄付で作られた。
- ・ 東南アジアの子どもたちは、震災直後「復興こいのぼり」にメッセージを記し、励ましてくれた。勤務先の学校の子子どもたちは、東南アジアからの支援の御礼に、感謝のメッセージを「お返しこいのぼり」に託して贈った。言葉が通じなくても、心が通じ合えば、友達になれる。互いの子どもたちの心の交流が実現した。そのときの、子どもたちの目を見て、心の灯が輝きはじめたと感じた。
- ・ ラオスのNGO代表が来校したとき、「最も大切なことは、勉強するよりも、人の役に立つ人間になることです」と語っている。それは日本でも同じで、人の役に立つ人間になる教育は、世界共通なものである。

(5) 瞳の輝きのわけ

- ・ 小さい妹や弟の世話をする。メコン川の濁流の中で魚を捕る。薪取りや水汲みに行く。機織りをする。食料となる木の実や野生動物を捕まえる。ラオスの子どもたちは、家族のために自分ができることを行っている。そして、自分は家族の一員であり、人の役に立っている存在であるという体験的自覚や意識をもっている。それが、自己肯定感や自尊心の裏付けとなり、子どもたちの瞳の輝きにつながっている。
- ・ 人間の最も人間的な心の中心は、前頭前野である。前頭前野には、仕事脳、学習脳、共感脳がある。その中でも、共感脳は「人のために自分は何ができるか」を考える脳であり、人間しかもっていない。2歳から20歳までで発達を終えると言われている。ラオスの子どもたちは、共感脳が発達しており、自己有用感の形成に結びついている。日本でも、小中学生の頃に、人のためにできることを考えさせるようにしたい。



(6) 自己肯定感、自己有用感、自己効力感、そして、自己使命感

- ・ オーストラリアのニック・ブイジチ氏は、生まれたときから両手、両足がない。それでも、「私は幸せ」と言い切る。ニック氏は、両手と両足がなくても、起き上がれることを自分で転んで人々に伝えている。「100回失敗しても、最後まで頑張れば必ず起き上がる。途中でやめたら終わってしまう。だから、こうして起き上がるんだよ」と、転んで起き上がる姿を見せる。「私が転んで起き上がる姿を見せることで、みんなに生きる勇気を与えることができる。だから私は幸せだよ」と言う。ニック氏の姿から、生きる喜びや生きがいとは何かを学ぶことができる。

- 学校を中核として、家庭で、地域で、社会で、子どもたちが人の役に立つ経験を積み重ねられるようにしたい。多くの豊かな体験を通し、新しい「学校」の創造につなげていけるとよい。
- 聖路加国際病院の名誉院長だった日野原重明氏は、「命というのは、使える時間である。自分のもっている時間を誰かのために使ってほしい」という言葉を残している。しかし、日野原氏は、「使える時間」ではなく「仕える時間」と言いたかったのではないかと解釈している。
- 自己肯定感、自己有用感、自己効力感、そして、自己使命感をもたせたい。自己使命感をもつことは、自分は何のために生きるのかを知ることである。それを知った子どもは強い。言われなくても、自分から学ぶようになっていく。
- 世界に羽ばたき、自己使命感をもち、幸せな自己実現が果たせる子どもに育てるために、親として、大人として、祖父として、何ができるかを考えている。

2 質疑応答

Q 自己使命感をもたせるための、子どもたちへの接し方のヒントを教えてください。

A 家族の一人としての役割をもたせて、人のために役立つという経験をさせる。ただし、押しつけるのはよくない。また、何の条件もなくほめるのもよくない。

5つ言ってみて、1つでもできたら、ほめて励ますようにする。それが次へのエネルギーになっていく。

Q ラオスにも日本のようないじめの問題はあるのか。

A 日本のようないじめはない。それは、大人に管理されない異年齢の遊びがあるからである。遊びの中でも、年上の子が年下の子の面倒をみるなど、自己使命感があるので、彼らは学ぼうとする意欲がすごい。そこに、いじめは存在しえない。大切なことは、学校や地域の中で、大人が管理したり、あまり口を出したりしない異年齢の縦割り活動を充実させていくことである。



※ 宍戸氏の豊富な実践に基づいた力強い講演に、どの参加者も真剣な表情で聞き入っていた。本当の幸せとは何か、人が生きる意味とは何かを考える貴重な時間となった。東南アジア山岳少数民族の子どもたちの瞳の輝きから、日本人が忘れかけている大切なものを、心の中で感じ取っていた。

★ 参加者の声

- 子どもたちの自己使命感を、家庭から育てたいと思いました。豊かな生活の中、受け身になるだけでなく、生きる意味を理解して健やかに育ててほしいです。
- とても感動して心を打たれました。話に引き込まれました。子どもを育てていく上で、「人の役に立つために何ができるか」ということがとても大切だと思いました。それらのことを子どもと話し合っ、「輝く瞳の子ども」に育てていきたいと思ひます。
- 「人の役に立つこと」や「使命感」は生きる意味だと思いました。子どもたちにそのような思いをもたせれば、自殺などということはなくなると思ひます。
- 我が子たちの目の輝きを奪っているのは、親である私自身だと反省しました。毎日、「宿題しなさい」「片付けしなさい」など、命令口調で怒ってばかりです。自己肯定感など育つわけがありません。ラオスの子どもたちから、私が大切なものを教えられました。我が子たちにも、今日の講演をきかせてあげたかったです。
- ラオスで生きることと日本で生きるとはまるで違うけれど、人の役に立つことは人間なら同じなのだと感じました。子どもたちには、たくさんの経験をさせるべきだと思ひました。その中で、自己使命感をもてる子どもを育てることが親の役目だと思ひました。